談話室

生き甲斐の農業

私は20歳代の終わりから毎年，夏の数ヶ月をイタリアでの発掘に過ごしてきた。ポンペイ，シチリア，タルクィニア，そして現在発掘中のヴェスヴィオ山麓である。この間，イタリアの農業に関してもいくつかの見聞を得ることができた。その一つがローマの北西約120キロにあるタルクィニア郊外のカッツァネッロで10年以上続けた発掘においてである。

カッツァネッロの遺跡はある旧家が所有する農場の中にあった。現在400ヘクタールほどのその農場は1960年代までは倍以上の広さがあったことを，農場の管理人が懐かしそうに話してくれた。とくに戦前から50年代までは100家族以上が農場内に住んでいたので，管理事務所のそばには小学校や礼拝所があり，日曜には万屋が生活必需品を売りに来たという。しかし，60年代の中ごろから機械化を進めたため，農場内に住む家族は皆無となり，現在では通いの作業員が10人ほどいるだけだという。

管理人の話では，機械化が始まる以前は，かなりの種類の作物を同時に栽培していたという。農場に住む家族用だけでなく，約５万ほどの人口を抱えていたタルクィニアに季節の野菜を出荷するためであった。ところがスーパーマーケットの進出によっていわゆる地産地消が終了したばかりか，効率化のために機械化と少品種化を進めざるを得なくなったという。そのような合理化をしても，ドイツ，フランス，スペインの農業に対抗することはできず，90年代終わりからは，政府の補助金をもらうために作付けしているようなものだという話だった。こんなことなら採算を無視して，楽しい農作業をたくさんの家族とやった方がどれだけ楽しいかと慨嘆していた。

カッツァネッロでの発掘を開始した最初の年，遺跡脇の畑にトマトが鈴なりになった。学生たちは昼食のサラダ用にバケツ一杯のトマトをもぎってきた。ところが，一緒に働いているイタリア人作業員たちは，２～３日前に農薬を散布したばかりなので食べてはいけないという。学生たちがもう一度よく洗おうとしたところ，洗ってもだめで，少なくとも１週間の時間を経過しなければ農

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

薬は消えないということだった。

競争力を高めるための機械の導入は，少品種大規模農業につながる。カッツァネッロの場合，大規模というより中規模といった程度であるが，その程度でもあきらかに人体に悪い農薬を使用せざるを得ないのである。というのも，カッツァネッロの土地はお世辞にも肥えているとはいえなかった。秋にムギをまくため，８月末にトラクターで土を掘り起こすが，粘土分が混ざっているため両手でやっと抱えることのできるほどの大きさにしかならない。この段階でムギをまくことはできない。土が真夏の太陽の強い光で熱せられており，種が焦げてしまうからである。９月に入っての夕立や季節の変わり目の強い雨が降ることによってようやく固まりは人のこぶし大になり，土も冷えるので種まきが可能になる。しかもやっかいなことに，トマト栽培の場合，連作をすると収穫量が半分以下になり病気にかかりやすくなるという。かろうじて採算のとれるトマトでも(現在ではトマトもだめになっているという)，連作は御法度だという。また，作付けができても，十分な農薬散布で病気の発生を抑制する必要があるという。

国際競争力のある農業国に囲まれているイタリアの農業はかなり厳しい状況にあるが，2002年から発掘を開始したヴェスヴィオ山麓地帯はまったく状況が異なる。ポンペイを埋没させたことで有名なヴェスヴィオ火山の周辺は，数ヘクタールもない小さな農地に分割されており，さまざまな野菜や果物が１年中実っている。この一帯では，トマトの連作が可能であり，連作をしても地力が落ちるようなことはまったくないという。耕作地の面積あたりの価格がイタリアでもっとも高いのも土壌が肥えているためである。しかし，その原因は皮肉なことに，火山噴火に原因しているのである。噴火物がもたらすカリが土壌更新をしてくれるからであり，それだけの豊かな土壌であるため，多品種小規模農業でもやっていけるのである。しかもこの地帯の住民たちは大地の恵みを心から感謝し，誇りにしている。そのことが決して豊かではない彼らを，底抜けと思えるほど陽気にしている。土地にあった農業はそこに住む人々の人生観さえも変えてしまうようである。

(国立西洋美術館館長　青柳正規・あおやぎまさのり**)**

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。